

教職大学院

Newsletter No. 95

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2017.4.15

教師の「省察」を省察する

静岡大学教育学部附属教育実践総合センター

准教授 長谷川 哲也

じつに16年、32回の蓄積のある実践研究福井ラウンドテーブルに、この度参加させていただきました。今回も福井県内外から多数の教育関係者をご参加されたとのことで、福井大学の継続的な取り組みが全国に浸透していることが窺われます。私たち静岡大学のグループは、Zone B2に参加させていただきました。ここでは、各大学の教員養成に関する取り組みや学生の教職への夢を、語りあい、聴きあうということで、静岡大学の学校支援ボランティアにおける省察について報告をさせていただきました。

そしてこのクロスセッションの最後には、各グループで一枚の紙に意見をまとめるという作業を行ったのですが、意見がまとめられたグループと、まとめられなかったグループがありました。異質な他者が初めて出会い、それぞれの経験を語りあい、聞きあったわけですから、限られた時間の中で共通項を拾い上げることができなかった（あるいはあえてしなかった）グループがあったことは、想像に難くありませんでした。このことを踏まえて私は、「意見がまとめられたグループも、そうでなかったグループも、この場において意見をまとめるという行為自体の意味を考えてみてほしい」と発言させていただきました。この問いが、表題である“「省察」を省察する”につながっていくわけです。

教師の省察については、ショーンの議論が広く知られています。ショーンによれば、実践家は、反復や決まりごとによって「実践の中の知」を暗黙で無意識なものとしてしまうことで、今の自分が行っていることについて考える重要な機会を逃しており、修正できない誤りのパターンに引き込まれてしまうといいます。こうしたパターンから抜け出すためには、反復経験から生み出された暗黙知を意識化し、

批判するための「省察」が必要であるとしており、これによって自分自身が経験するであろう不確実性に立ち向かうことができると指摘しています。それでは、教師が直面する不確実性とは何でしょうか。様々な議論がある中で、ここでは二つの側面に注目します。一つ目は、仕事そのものに由来する不確実性です。ローティは著書『学校教師』において、教員は他の専門職と比較して仕事内容が不確実であり、それを「職業的風土病」とであると表現しました。これは、教育実践という仕事が文脈に依存するものであり、価値がきわめて多元的であってその評価が定まらず、成果も見えづらい営みであることを意味しています。二つ目は、今の時代や社会に由来する不確実性です。グローバリゼーションの波に洗われ、高度に産業化・情報化した今日の社会では、学校や教師をめぐる制度、家庭や地域の環境、そして子どもの学び自体が、外的要因によって変化します。そして多くの場合、その変化は予測不能です。こうした二つの不確実性から、「いつでも」「どこでも」

内容

- 巻頭言 (1)
- スタッフ退任のご挨拶 (2)
- 第2回運営協議会報告 (3)
- スクールリーダーだより (5)
- 長期実践研究報告会 (11)
- 伊那小学校公開学習指導研究会 (12)
- 赤塚第二中学校ラウンドテーブル (13)
- 平成28年度学位記授与式 (14)
- 平成29年度教職大学院年間計画 (15)
- 修了生の学校改革実践研究報告タイトル (16)
- 編集後記 (16)

「誰にでも」通用する教育実践が見いだすことは、いっそう困難になっています。

教師の仕事に影響を及ぼす諸要因が複雑化・多様化すればするほど、それらの要因を注意深く見極め、学校現場を相対化する力が求められます。不確実性を正面から受け止め、自分自身の実践の中で (in)、あるいは実践について (on) 省察し、そこから学ぶというショーンの「反省的実践家」という概念は、今もなお傾聴に値するのです。自分自身の行為やそこから生まれる知を反省的に捉え直し、文脈を超えて転移可能な知へと進化させるというプロセスにおいて、省察の意義はより強調されるべきでしょう。一方で、省察が無批判に“良いこと”とされ、当たり前前に反復されるだけでは、省察によって生み出さ

れる知は暗黙なものとなり、その重要性に気づくことができなくなるかもしれません。「省察」という行為すら批判的に捉えて省察するという姿勢も必要ではないでしょうか。

いみじくも、本稿執筆にあたって先行研究を調べていたところ、信州大学の越智康詞氏が2004年に発表された「教職の専門性における『反省』の意義についての反省」というタイトルの論文を見つけました。そこで越智氏は、「あらかじめの線引きで問題を解消することが不可能である以上、われわれに残された道は反省的＝漸進的な改善しかない」と指摘されておりました。線引きが難しい教師という仕事を議論するとき、「省察」の意義を問い直すことは不可欠であると、あらためて実感しました。

スタッフ退任の挨拶

福井大学教職大学院 准教授 宮下 哲

私がこの3年間、福井大学教職大学院の一員として精一杯学ぶことができたのは、私を「映す鏡」や私が捉えられていないものを「照らす鏡」…多くの鏡と出会えたおかげです。

私の稚拙な問いを拾い上げ、その問いが解決可能な課題になるように構想・構築に随伴し、更に実行し再構成しつづけるサイクルが展開するよう励ましてくださった方々。ご自分が実践の中でどのように思考し判断しているのかを、長期にわたりありのままに開示してくださった方々。他者の実践の歩みを読み解き可能性の芽をとらえて位置づける厳しい取り組みに、強い覚悟と温かく深いまなざしをもって向かわれる方々…。多くの方々の実践やそこでの姿、思考や判断を伴う立ち居振る舞い…などが私を「映す鏡」です。「映す鏡」は、一見すると他者の実践であり他者の思考や判断などのようにも思えますが、よくよく考えてみると、私が他者の実践や思考や判断などをどのように捉え考えているのかを問うたとき、そこで用いる言葉や文脈は、結局のところ私自身であることに他ならないと思知知のです。私の周りにある豊かな鏡は多角的・多面的に私を映しながら、私の実践や思考・判断などが一面的であることを示してくれています。しかも、どこか外側から指摘し知識や技能を注入するのではなく、あたかも私自身が自身の不十分さに気付いたかのようにさりげなく、私が必要感を持って自分自身の思考力・判

断力・表現力等のあり様を探究しつづけられるよう支えてくれています。

「映す鏡」は、同時に「照らす鏡」でもあります。鏡に映る私の姿を深くとらえようとする、いま目の前に見えている姿だけでなく、それを支える過去の事実にも目を向けなくてはなりません。それらの中には、多くの喜びや愉しさと共に、失敗も悔しさも苦さも…忸怩たる思いをも伴った幾つもの実践→省察→再構成のサイクルがあります。そこに目を向けとらえ直すときには大きな勇気と忍耐を要しますが、鏡がその困難に向かう私を助けてくれるのです。個々のサイクルはバラバラの実践の羅列ではなく、実践と実践をつなぐ文脈があること、文脈を編むための針と糸が他の誰でもない私の実践の中にあることを鏡は照らします。そして鏡は、その針と糸を活用することで、私が私自身の実践や他者の実践の持続的な展開を支え得る鏡になれるかも知れないと、行く道を照らしてくれています。

ところで、私が様々な鏡にめぐり会ったり鏡に映し照らされる私や行く道をとらえることができたりするのは、光があるからです。私の内にある求める心と鏡である他者の内にある求める心が、協働の実践の中で共鳴し合い生み出しつづける光があるからだと思います。その光がなければ、鏡が面前にあっても、鏡の存在を認識する縁は生じなかったでしょうし、光があってはじめて、私は鏡の中に私の姿を

見出し、行く道が照らされていることを認識できるのだと思います。

私のふるさと長野県にゆかりがある島崎藤村の詩の一説に「私たちの急務はただ眼前の太陽を追ひかけることではなくて自分らの内に高く太陽をかかげることだ」という言葉があります。鏡や、鏡が映している自分や照らしているものを光と勘違いしてはならないと諫めている言葉のように思います。光は私と他者の協働探求によって「自分らの内に」生まれるのだということを感じせよと励ます言葉の

ようにも思います。私たちの求める心が共鳴して生まれた光を更に太陽のように育て私たちの内に掲げ続けること、そして太陽の光を受けて互いを「映し照らす鏡」を磨き合う探究をし続けていくこと…これが、この改革に参加した私の為すことだと思います。3年間大変お世話になりました。本当にありがとうございました。他の地にあってもこの改革の一員です。今後ともよろしく願いいたします。

(現 長野県教育委員会事務局北信教育事務所主任指導主事)

第2回 運営協議会報告

3月14日(火)午後2時から、福井大学文京キャンパス、アカデミーホールにおいて、平成28年度第2回運営協議会を開催しました。石井パークマン麻子・教育学研究科長、来賓の松田健志・県教育庁学校振興監の挨拶の後、全体協議会及びグループ別協議を行いました。前半の全体協議会では、次の内容が協議され、原案通り承認されました。

- ・平成28年度年間報告及び平成29年度年間計画(案)について
- ・学校改革マネジメントコースの展開について
- ・連合教職大学院について
- ・県教委・教育研究所との協働組織について
- ① 平成29年度学生募集状況について
- ② 教職専門性開発コース修了者の就職状況について
- ③ 平成29年度教員免許状更新講習について
- ④ その他



全体協議会では、教職大学院から、昨年度の内容に加えて今年度開設した学校改革マネジメントコースに在籍する15名の現職教員院生の学びの状況を紹

介しました。また、平成30年度からのスタートに向けて準備を進めている福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学による連合教職大学院構想および教員免許状更新講習の必修と選択必修の講習を来年度から県教委と共催で実施する旨の説明をしました。後半のグループ協議では、県教育委員会、市町教育委員会、拠点校、連携校(2グループ)の5グループに分かれ、院生の学びにおける成果や課題、教職大学院への要望等について活発な意見交換をしました。

グループで話し合われた内容の要旨を紹介します。

【県教委員会】

- ・教育研究所、嶺南教育事務所としては、教職大学院との協働は重要であり、所員が教員免許状更新講習のファシリテーターをしたり、大学からは研究所のフォーラムや協働研究会にも参加したりしていただき有り難い。これからもさらに連携を進め、大学と生涯にわたって学び続ける教員のための研修づくりに取り組んでいきたいので、今後も支援をお願いしたい。
- ・教員研修のスタイルや研修全体の在り方の検討をしているが、教員の研修の一元化、研修の履歴管理、勤務校で研修ができるテレビ会議システムの活用や単発ではない継続した訪問研修等、研修全体の交通整理をして、各教員にプラスになるものにしていきたい。将来的には大学の力も借りながら、育成指標も明らかにしていきたい。
- ・院生募集については、学校現場での学費負担や管理職になるために大学でマネジメントを学ぶ理解不足等が課題である。

【市町教育委員会】

- ・教職大学院のスタンスが学校の課題に寄り添っているのが有り難い。自校の他の先生方をうまく巻き込んでいる。市の教頭会や教務主任会等で中間発表をしたが、参加者の意見を得てさらに実践を重ねている。保護者の意見も取り入れており、教育委員会として大変有り難い。
- ・課題として、教職大学院で学ぼうという教員が少ない主な理由は、経済的負担やインセンティブがないことである。また、教職大学院での学びは、在籍校の校長の理解が必要であるが、教職大学院への理解不足が否めない。もっと宣伝をして、学校と教職大学院とが WIN-WIN の関係であることや教員が教職大学院で学ぶメリットを現場に伝えたい。
- ・教頭登載者が在学中に教頭になった場合、その学校には2年くらいしかいないので、自校の課題把握等の見極めは難しい。異動した場合、校長のスクールプランを受けてから実践をスタートさせるには時間的な制約がある。このイメージが対象の教員の頭にある。入学して1年で異動する可能性もあるので、この場合のフォローを考える必要がある。

【拠点校・連携校】

- ・ストレートマスターの院生は、インターン、教員としての業務、いろんなことをお願いして大変かと思うが、フットワークがよく、志が高い人が多い。自分から率先して教師の仕事の隙間を埋めてくれるような活動をしている。子どもたちと年齢的にも近く、子どもたちの様子を教師とは違う視点で見取り、子どもと教師の繋ぎ手の役割を担っている。
- ・ストレートマスターの院生には学校のスタッフとして、気がかりな児童への支援員としての役割も担ってもらうこともある。後半には担当クラスから離れて、シャッフルし、他学年も経験してもらえるようにしている。2～3月には1年間のまとめとして授業実践をしてもらっている。
- ・教員の院生は研究を通して通年で大学にアドバイスをいただきながら、日々、自分の実践を振り返るのに役立っている。
- ・ストレートマスターの院生には、現在の教員に要求されている教科専門性を高める教育を、マネジメントコースでは院生個人における実践と省察も大事だが、組織の実践と省察することを大事にして、学校としての組織力を上げられるよう考えてほしい。

- ・ラウンドテーブルに児童が参加し、学習のまとめを発表したが、保護者にも大変好評だった。今後も継続していきたい。また、院生以外の教員も報告の機会を得ることができたのはよかった。
- ・教職大学院だから学べる、一步先に行けるといいう明確なものがあるとよい。新学習指導要領や最近の教育動向等の学んだことを学校に持ち帰り、同僚が学べる機会を持ちたい。
- ・学校改革マネジメントコースの院生は教員人生を振り返りつつ、その時々々の課題を分析して、今の学校の課題として新たな視点で分析しており、学校としても学ぶところが大きい。
- ・今年度、大学のスタッフの方には研究会等で何回も学校に来てもらった。校内研究の方向性を示して貰えたり、一緒に考えたりして貰え有り難い。ぶれずに研究を進めていけるのは大学の協力があるからである。内部の人間だけで考えているとこれでいいのかと迷うことがあるので、外部の先生方に色々とアドバイスをもらえるのは、今後の方向性を見定めていく上で非常にありがたい。
- ・今年度、都合がつかずに大学の方に来てもらえないということもあった。早めに予定を知らせることで、できる限り来てもらえると有り難い。

他にも連携校である幼稚園や認定こども園から保幼小の連携や幼児教育支援センター等での継続した教員研修の紹介があり、小学校の視点からみた連携の在り方について話し合いました。

これら運営協議会の各グループでの協議内容は、教職大学院スタッフで再度分析・検討を行い、関係学校、教育委員会との連携を深め、今後の教職大学院運営や状況改善に生かしていきたいと思えます。



スクールリーダーだより

大学院での2年間を振り返って

スクールリーダー養成コース／敦賀市立気比中学校 浜上 千恵

2年前の春、これまでの先輩方が執筆された「長期実践報告」を読ませてもらった時、この2年間で自分もそれを完成させることができるのだろうか？と不安で仕方なかった。案の定、M2になってからの1年間は、いつもその事が頭の中であって気持ちがとても重かった。しかし今、いろいろな方々に支えていただきようやく完成できた報告書を手にとって見ると、大学院入学を決意した日から今日までのことがあれこれと思い出された。正直なところ、実践報告も他の方に比べるとまだまだ研究半ばのところが多い。しかし、今の自分にとっては、これまでの自分とこれからの自分をつなぐための大切な「省察」期間だったと感じている。2月、外国人の方の前でラウンドテーブル報告を行った。『若手教員の実践的指導力育成を支援して』のタイトルで行ったが、すべてを英語で伝えるのはとても難しいと感じた。しかし、これもまた『チャレンジ』だと考え気持ちを込めて報告した。そこで感じたことは日本だけでなく海外でも同じように教員の育成や研修には力を入れており、その難しさ大変さを痛感しているということだった。国は違っても共感してくれた

この時の感動を、今度は私自身が次のステージで行動に移し伝えていかなければならないと感じている。

今年もまた、暖かい日差しと共に春がやってきた。新たな出会いをするであろう子どもたちのために、同僚たちとまたスクラムを組んで、新たな研究を進めていきたいと強く感じている。そして今、福井大学教職大学院で学ぶことができたJD（女子大生）時代を振り返り、本当によかったと改めて感じている。お世話になった皆様、本当にありがとうございました。



「支え合い学び合う教師集団の育成を目指して」

スクールリーダー養成コース2年／高浜町立高浜中学校 北村 仁志

高浜町は福井県の最西端に位置し、美しい自然に恵まれ、ビーチの国際環境認証『ブルーフラッグ』を日本（アジア）で初めて取得した町である。また、本町は「人権尊重の町」宣言をし、人権を尊重した町づくりに力を注いでおり、本校においても人権・同和学習が学校教育の柱の一つとなっている。

本校は、各学年4学級、特別支援学級2学級、全校生徒321名の中規模校である。教職員数は約30名在籍しており、そのうちの約65%が20・30代の若手教員である。平成25年度から福井大学教職大学院連携校となり、大学院スタッフと連携し

ながら教職員一丸となって教育活動に取り組んでいる。私は、昨年度から教職大学院に入学し、同時に研究主任の立場を任されることになり、早2年が過ぎようとしている。また、今年度は教職大学院に、私を含む3名の教員が在籍しており、学校の活性化を図るためにそれぞれの立場で努力している。

さて、昨年度春の定期異動によって半数近くの教職員が入れ替わり、若手教員が大幅に増加した。このことにより、教員として、そして担任としての経験が浅く、授業力や生徒指導力などの向上が必須と考えられた。また、昨年度までの様子が分からない

教員が増え、より一層共通理解を図る必要性が出てきた。

こうした課題を乗り越えていくために、本校では「つながる」を大きなキーワードとして、これまで様々な取組を行ってきた。授業づくりの面においては、生徒一人一人が、「教師と」・「教材と」・「生徒同士で」つながることを意識した授業展開に努めた。また、様々な教育活動において何と言っても「教師同士がつながる」こと、すなわち「協働」していくことが重要であると考えた。

そこで、まずはそのベースとして、教職大学院と連携を図りながら研究を進めてきた。福井大学教職大学院は学校拠点方式であり、月間カンファレンスや年2回行われる福井ラウンドテーブルなど、「自身の実践を語り、他者の実践を聴き、そして他校や著書などから学ぶ」ことを通して、「実践」と「省察」を繰り返しながら日々取り組んできた。

これまでの取組を振り返ると、自分なりに必要感を感じて、研究部の先生方と協力しながら進めてきたわけであるが、「これでよかったのだろうか。」と後になって不安にかられることもあった。しかし、12月中旬に、その不安の解消につながる体験をさせていただくことがあった。それは、以下に述べる日本教職大学院協会研究大会に参加させていただいたときのことである。

平成28年12月17・18日の2日間、東京で開かれた日本教職大学院協会研究大会に参加する機会をいただいた。私は、2日目に行われたポスターセッションの発表者として、本校の教務主任である一瀬泰史先生と一緒に発表させていただいた。

発表の準備にあたり、まず「何を一番伝えたいのか」を考えたとときに、真っ先に思い浮かんだ言葉は、やはり「つながる」であった。これまでずっと「つながる」ことを研究の核として取り組んできたため、この言葉は絶対に外せないと思った。また、私自身がこれまでに意識して取り組んできた「教師同士のつながり」「コミュニティの育成」についても伝えたいと思った。こうして、最終的に決定した発表テーマが「つながり合う教師のコミュニティ育成を目指して」である。このテーマは、私自身の長期実践研究報告のテーマである「支え合い学び合う教師集団の育成を目指して」にも、ほぼ一致していた。

研究大会初日。午後からの分科会において、福井大学教職大学院の発表を聴かせていただいた。前半は、木村先生、宮下先生が教職大学院での取組についてご発表され、後半は、ラウンドテーブル形式で各グループに分かれて、ストレートマスターの院生たちがそれぞれに発表をしていた。私はその様子を

参観しながら、2つのことを感じていた。1つ目は、院生たちの堂々たる発表ぶりに感心させられたことである。もちろん緊張していたかもしれないが、これまでに自分たちが実践し学んできたことを、自信を持って堂々と発表している姿に感銘を受けた。2つ目は、ラウンドテーブル形式で行う分科会の様子に、福井大学ならではのよさを感じたことである。一般的にこのような場では、ずっと発表を聴き、最後の方で質疑応答などがあるという形式が多いであろう。しかし、後半にラウンドテーブル形式で行うことにより、各グループで互いに語り合うことができ、堅苦しい雰囲気が一気に和やかに変わったように感じた。このような大きな研究大会の場においても、ラウンドテーブル形式で語り合うことで活発な意見交換ができる。私は参観しているだけであったが、何とも居心地のいいものだと感じていた。もうすっかりこの形式の虜になってしまったようである（校内研修会でも、ほぼグループ形式で行っている）。

いよいよ第2日目。ポスターを所定の位置に貼り、配付資料を机上に準備した。他教職大学院のポスターを見ると、どのポスターもそれぞれに実践研究されてきたことが所狭しと書かれている。それを見ながら、「自分の作ったポスターはこれでよかったのか？」と不安になった。発表時間はわずか6～7分間。質疑応答や移動時間を含めて計10分間であった。しかし、結果的に10分間を越える発表となってしまった。

各大学院からの発表が終わり、自由に質疑応答する時間があつた。数名の方から、「高中（たかちゅう）合同カンファレンス」について、「この取組はとてもいいですね。こういう時間が本当に大切ですよ。」という御意見をいただき、とても嬉しく思った。高中合同カンファレンスは、昨年度、教職員の同僚性を高めるために、各自の悩みや思いを語り合うという初めての企画である。結果的に夏季休業中に1回しか実施できなかったが、その取組に対して、このような御意見をいただけたことは、私にとって大きな自信につながる結果となった。

フリーの時間には、他教職大学院のポスターを見て回った。どれも理路整然とした内容で見応えがあつた。そのような中で、各大学院のポスターを見て一つ思ったことがある。それは、学校現場において実践研究を進めておられる院生のポスターに、共通するキーワードが記載されていたことである。そのキーワードは「つながる（り）」である。どの学校現場においても、やはり児童生徒や教職員のつながりを意識して日々取り組んでおられることが分かった。それと同時に、私の中に「これまで取り組んで

きた実践は間違いではなかったのだ。」という自信につながった。

その反面、各大学院のポスターを見てどこか違和感も抱いていた。それは、ほとんどのポスターが「同僚性」「協働」といった教職員全員で取り組んだ実践発表ではないということである。単に、私が他教職大学院の方針やシステムを知らないだけかもしれないが、大半は院生個人がアンケート等で調査した結果を数値化し、表やグラフなどに示された形であった。教科の授業研究をテーマにしたものについてはそうとは限らないが、理論的にまとめられたものや概念を図示したものが多いという印象であった。学校現場で「協働」しながら取り組んだ実践発表というものが、意外に少なかったように感じたのである。

それは、やはり教職大学院のコンセプトの違いからであろうか。福井大学教職大学院は、学校現場（拠点校・連携校）において日々実践を積み重ね、そして、教職大学院においてその実践について省察をしている。また、教職大学院が学校づくりや組織づくりのサポートを担い、学校現場と連携を図りながら研究を進めるシステムである（と私は思っている）。しかし、大学によっては、学校現場から一旦離れて教育理論を中心に学ぶシステムや、週に3日、学校勤務が終わってから大学院へ通うというシステムなど様々あるようである。それぞれに一長一短はあると思われるが、今の私にとっては、福井大学教職大学院のシステムがベストだと考える。嶺南最西端から約2時間かけての通学は、正直言ってつらいものがあるが、学校現場での実践と教職大学院での省察が繰り返される中で、私自身、そして学校全体が成長していくことができる。他教職大学院のシステムについては、まだ理解していないことが多いが、この「実践」と「省察」のサイクルが福井大学教職大学院のよさではないかと思っている。

2日間の日程を無事に終え、帰路に着いた。帰りの新幹線の中で、協会年報に掲載するための発表概要の原稿を作成しながら、この2日間のことを振り

返っていた。今大会を通して本校の取組に自信を持つことができたこと、福井大学教職大学院での学びのよさを改めて感じることもできたことなど、発表者として参加することができて本当によかったと実感している。これも、機会を与えてくださった教職大学院の先生方のおかげであると感謝している。そして、同じく発表者として参加してくださった一瀬先生にも、御迷惑だったかもしれないが快く承諾していただき、私にとってはとても心強く、本当に感謝している。

これまで、本校の先生方と一緒に「つながる」をキーワードとして、「支え合い学び合う教師集団」へと成長していくことを目指して一生懸命に取り組んできた。そして、スクールリーダー、研究主任という肩書きに重責を感じながらも、少しでも校内の研究が活性化し、教師同士のつながりが深まり、互いに支え合う関係ができるようにと様々な取組を進めてきた。しかし、その中で一番心から支えられていたのは、間違いなくこの私である。教職大学院に入学してからの2年間で、本当に多くの方々と出会い、多くのことを学ばせていただいた。それは、本校の先生方からだけではなく、教職大学院で出会ったスタッフの先生方、他校の先生方、ストレートマスターの院生たち、また、ラウンドテーブルなどにおける他県の方々と、数え切れないほどの多くの方々と「つながり」の中で得られた学びである。私はみなさんに支えていただきながら、ここまでやって来られたのだと感謝している。これまでの多くの「つながり」がなければ、今の私は存在しない。

「支え合い学び合う教師集団」への道のりは、まだまだ長い。校内研究の推進、組織づくり、多忙化解消、若手教員の育成など、これまでの取組の中で明らかとなった課題を克服するためには、まだまだ私が知らないことを吸収していく必要がある。常にアンテナを高く張り、解決方法につながる情報をこれからもしっかりとキャッチしていきたい。そして、いつまでも「学び続ける教師」でありたい。

スクールリーダー養成コース2年／奈良女子大学附属中等教育学校 塩川 史

新しい年を迎えると、特に学校では時間が早く流れるようです。今年度もゴールが見えてきました。ここ、奈良では盆地の底冷えで最低気温が氷点下という厳しい寒さが続いており、春はまだまだのようです。「奈良の春は3月12日の東大寺のお水取り

が終わるまでは来ない」と言われています。その「お水」は福井県小浜市から送られ、二月堂の若狭井に届くという伝説があり、福井と奈良のつながりは長く深いのです。

さて、拠点校となって2年目、福井大学教職大学院で現在3名が学んでいる奈良女子大学附属中等教育学校では、教員の移動がないことから早くも来年度の分掌配置が決まり、旧年度と新年度が交錯する複雑で落ち着いた時期を迎えています。

来年度、学校は大きく変わります。一つは、授業がこれまでの45分7限から65分5限になることです。授業時間は保持しながら、協働・探究の学びがある授業を作っていこうと授業の質的変換をめざしています。

また、校内組織改革にも取り組み、その第1歩として学校の「戦略」を練る学校経営委員会が発足します。教師がキャリア形成を学校で行い、持続可能な学習する組織であるためには、働き方を変え学びの時間を確保する必要があると考えているからです。国立大学の附属、特に教員養成系大学ではない大学の附属は大変厳しい状況に置かれており、存続をかけた改革が求められるのですが、在籍している生徒にとっては、かけがえのない6年間です。通塾による受検を経て入学した生徒が多く、学習に関してす

で持っているマインドセットを解く必要があります。塾とは異なる学校で、学ぶ楽しさと人につながる意味を体に染み込ませて欲しいと思います。授業で主体的に学ぶ生徒は、学校運営に関与する教師と相似形です。学校で参加することを学んだ生徒は、希望を持ち幸せな社会を作ろうと主体的に働きかけていくのでしょうか。

今年度は学校のミッションを基本理念、ビジョンを教育目標として整理しました。学校は変わってはならない存在意義と、時代の変化や社会の要請に応じて変わっていくしなやかさの両方、つまり継続と変化の両面を持ち続けていくものだと改めて考えさせられました。

1月半ばに入学適性検査を終え、すでに来年度入学予定者が決まっています。6年生が巣立ち、新入生を迎える学校は、冬が終わって春を迎える自然と同様に死と再生のリズムを繰り返しながら、成長していくようです。

縁を大切に

スクールリーダー養成コース2年／長野市東部中学校 神部 浩平

福井にやってきて1年目の私は、福井市内の中学校で勤務をしながら教職大学院に通っていた。あくまでも“県外からの派遣教員”としてお邪魔しているような立場であり、研修・研究会で学校にいない日も多い。私自身何がどこまで学校の役に立てるのか手探りだったものの、福井の学校はそんな生ぬるいことを言っている環境ではなかった。猫の手でも、といった様子の4月当初は、不安が過る暇もないような仕事の忙しさだったことが懐かしい。一年間終わった後で振り返っても、毎日毎日本当にやるのが山積みだった。そういった大変な仕事を乗り越えてきているからなのか、福井で出会った先生方はとても情熱的で、職員室には一体感があった。そんな福井の先生に私は簡単に魅了されたのだった。

教職大学院での出会いも刺激に満ち溢れていた。カンファレンスやラウンドテーブルで集まる人たち、そこで生まれる話題。どれも私の考えや想いを強く刺激し、自分の教師像が次々と壊され、新たな世界観へと変わってしまうような経験をする事ができた。話すということはモチベーションを高めてくれ

るものだと明確になったのも大きい。分厚い専門書や先輩たちの実践報告書を目の前にすると先行きが不安になることもあったが、毎回のグループセッションを通していつの間にか前向きな気持ちになれていた。全国から集まる先生たちと交流することで、長野の良さを再確認する機会があったことも収穫だった。いくつかの県を比較することで初めて気が付くことがあった。そういった経験を通して、私は学校にいるときも、客観的な見方を意識することができるようになったと思っている。

2年目からは長野県から福井へと通う日々だった。私の実践の中心となったのは、二学期に取り組んだ数学の授業となった。実感のある学びを目指し、多くの先生からアドバイスを頂き、仲間を増やししながら追究していくことができたと思っている。それらのことを実践報告でまとめながら感じたことは、いくつもの出会いがあり、その人たちに支えられながら歩いてきた私なのだ、ということが一番である。もちろんこの先も教師としての追究は続いていく。

だが、教職大学院で過去を振り返りながら気が付いたことを、この先も忘れないようにしたい。

2月のラウンドテーブルで福井大学に来た時、冊子となった私の実践報告書を目にした。手に取って表紙を眺めていると、長いようで短い2年間がここに詰まっているのだと感じ、これまで味わったことのない深い感慨があった。教職大学院での2年間は、もう2度と経験することのできない、なんとも幸運な時間になった。長野県から福井県に派遣されたこ

とも、何人もの素晴らしい先生たちに出会えたことも、すべて運が良かったのだと思う。私はこの運、この縁から得たものを生かしていきたい。来年度はとりあえず、授業研究を続けながら、ラウンドテーブルへの参加を目指そうと思う。教職大学院や学校で出会った方々に感謝しながら、この縁を大事に守っていきたい。

生徒が主役の学校づくり

スクールリーダー養成コース2年／鯖江中学校 茨田 隆徳

鯖江中学校は各学年8～9学級という大規模校である。2年間教職大学院で学びながら、本校の学校文化とは何か見つけ直す機会を得たと感じている。本校の研究体制は大きく2つの組織から成り立っている。学習指導研究部会と、学級経営研究部会である。学習指導研究部会では、ここ3年間は授業のユニバーサルデザイン化を研究の柱としてきた。研究を始めたころは「視覚化」「焦点化」「共有化」といったキーワードばかりが先行し、その意味の理解も不十分なままに授業を試行錯誤していた感がある。3年目の今年は、一人一研究実践を記録に残すようにしたが、どの実践記録にも、本校が大切にしてきた分かりやすい授業をつくる試みが学校文化として根付いてきていることを感じさせるものとなった。本来ユニバーサルデザインとは空気のようなもので、あって当たり前のもので捉えられるべきものなのだ痛感する。また、学級経営研究部会では帰りの会でのスピーチ活動や道徳教育の充実を柱に取り組んできた。私自身は昨年度学級経営研究部の副部長、今年度は部長をすることになり、特に道徳の授業における話し合い活動の充実を重点項目にあげ、①お互いの授業を見合い、実践記録を残す取り組み、②指導主事訪問での校内研究会のもち方の工夫などを行った。①では、経験の浅い若い先生の授業を中堅のベテランの先生が見てアドバイスをしたり、逆に中堅の先生がお手本となるような授業を公開したりすることがとても効果的だと実感できる取り組みになった。また、②では、これまで本校ではあまり行っていなかった少人数によるグループセッションを取り入れ、参加した先生方の一人一人が、研究会の中で少しでも多く発言してもらうように工夫した。

これにより、満足感の高い研究会になったことが多くの先生方の感想からもうかがえた。

鯖江中学校の生徒は、ここ最近年々状況がよくなり、たいへん落ち着いた雰囲気の中で何事にも前向きで活発な学校となっている。部活動においても優秀な成績を残し、何よりも集会や学校行事での合唱の声の大きさはどの学校にも負けないほど見事である。なぜこれほどまでに学校の雰囲気が良くなってきたのだろうかと考えたとき、私は次の2つの点が重要ではなかったかと考える。1つは先輩から後輩に受け継がれる生徒自身の後ろ姿のすばらしさである。先輩がお手本となる後ろ姿を示し、その姿に後輩が純粋に感動しあがれているという声をよく聞く。学校への愛着心が育まれる環境が醸成されていると感じる。2つめは、そのような環境づくりに対して、校長の強いリーダーシップのもと、教師集団の意識の共有化が図られ、協働がなされていることだろう。昨年度からの2年間は、研究主題を「生徒が主役の学校づくり」と掲げて教育実践を進めてきた。その柱となるのは、生徒の主体的な活動を様々な場面でしかけることである。しかし、ただ場を設定するだけでは生徒は主体的に活動しない。正しく行動するための力が備わっていなければ好き勝手な活動に終始してしまう。本校の教師集団の最大の強みとするのは、ここの部分の意識の共有化がはっきりとなされていることだと感じる。先に述べた本校の研究実践による取り組みもまた、教師集団の意識の共有化に果たす役割を担っている。

先日行われた卒業証書授与式は大変感動的なものになった。特に卒業生が送辞や最後となる学年合唱で見せてくれた姿は、後輩を始め参列された保護者

や地域の方々に、今の鯖江中学校の素晴らしさを伝えてくれた。これからも、このような学校文化を継

承する教育活動を続けいくことが大切であると考えている。

スクールリーダー養成コース2年／口名田小学校 正木 啓敬

1) はじめに

5年前の東日本大震災が、学びの始まりだった。

私は、福井県災害ボランティアに参加した。宮城県石巻市にある大川小学校は、津波のため、全校生徒の7割が死亡もしくは行方不明になった。私は、学校から流出し、泥にまみれた学用品・作品を洗浄する作業に従事した。遺品の含まれている可能性が高いため、心を込めて汚れを落とすように心掛けた。時折、保護者とおぼしき方が訪れて、愛おしそうに学用品を持ち帰った。

「もう、ものに執着するしかないんです。」

そう呟いておられた。本来、学用品・作品は、保護者にとっては子どもの成長を実感できるものである。保護者の想像を絶する深い悲しみが感じられた。

それ以前の私は、親が子どもをどのような思いで学校に預けているかを、深く考えてこなかった。しかし、学用品を押し抱く保護者を目の当たりにして、どれほどかけがえのないものを学校に託されているか、ようやく理解することができた。保護者は、自分の命よりも大切な「子どもの未来」を教師に委ねている。ならば、全力を尽くして、一人一人の子どもを、質の高い教育実践を求めていくのは、当然のことだと考えるようになった。次第に、その思いが醸成され、福井大学教職大学院への入学へと結びついた。

2) 「理論」について

質の高い教育実践を行うには、教育理論が足りない。教職大学院には、実践に見通しを与えてくれる

理論知がある。期待に胸を膨らませて入学した。しかし、教えて頂いたのは、自分の内に「理論」があるという「理論」だった。

見たこともない、感じたこともない「理論」を学ぶのではなく、実践を通じて、すでに見て、感じたことから「理論」を創るのである。ただ真似るのではなく、状況に照らし合わせて、自分の身体と感覚を通して考える。実践と省察の繰り返しから生み出された「理論」は、借り物ではなく、自分自身を支える実践の「足場」となった。

2年間、目新しさもなく、淡々と、日々の実践と省察を繰り返す、一人なら途中で挫折して諦めてしまうような険しい学びであった。大切なながらも険しい道を、一步一步進むことができたのは、遠方まで、何度も足を運び、懇切丁寧に指導して下さった教職大学院の先生方の支えのおかげである。感謝の念に堪えない。

3) 「対話」の大切さ

日々の無意識な営みや、心の深層に刻まれていたことが、対話を通じて浮かび上がってくる。そんな学びを、カンファレンスやラウンドテーブルでさせて頂いた。

どこまでが学びで、どこまでがおしゃべりか分からないような、フラットな連続性のある学びであった。しかし、シンプルで明快な対話の連続に、複雑で多様なペースが織り込まれている。心地よい学びのリズムの中で、物理的、心理的に障壁のない対話に促されて、多くの気づきが生まれた。

長期実践研究報告会

2月5日（日）に長期実践報告会が行なわれました。今年度修了を迎える院生はこれまでの自身の歩みと学びをじっくりと語ることで改めて振り返り、また1年目の院生は修了生の語りに自身の姿を重ね合わせながら熱心に耳を傾けていました。

長期実践報告書報告会

教職専門性開発コース／福井大学教育学部附属小中学校 串 尚哉

今回の報告会ではストレートマスター2年として、長期実践報告書を発表させてもらいました。報告をし、報告を聞く中で、反省（「〇〇がよくなかった。次があれば△△しよう。」）はあっても、後悔（「〇〇しなければよかった。」）はあまり感じていないと気がきました。教職大学院で取り組んだインターンシップ、週間カンファレンス、合同カンファレンス、ラウンドテーブル、それらが私にとって意義のあるものであったからだと思います。

長期実践報告を発表させてもらって、インターンシップが2年間の中心にあったのだと再確認することができました。一方でカンファレンスに関する記述は少ないとも感じました。なぜカンファレンスに関する記述が少ないのか。おそらく、他者から聞いたこと、教えてもらったことを、自分の言葉に代えて使っていたためだと思います。「〇〇先生がそういっていたから。」「本に△△と書いてあったから。」ではなく、聞いた内容、読んだ内容を飲み込み、噛み砕き、実践の考察として書き表す。つまり、私の報告書は、私のものであるけれど、私1の考えによってかかれたものではないということです。いつ、どこで、誰からもらったのかわからないたくさんの知識を、切って、貼って、組み替えて、そうやって出来上がったものなのだと思います。引用としての

記述は無くとも、カンファレンスなどの取り組みに意義を感じているのは、そうした理由からのように思います。

もう一点、報告会を通して気づかされたことは、まだまだ、自己分析が足りていないということです。報告書に書いた内容、報告会で話した内容、しっかり自分の考えや思い、その根拠を示せた部分もあれば、うまく言葉にできず、あいまいなまま言葉にできなかったものも多くありました。取り組みの意義にも通じることですが、感じることはできても、言葉にすること、他者に伝わる形にすることができませんでした。これは今後の課題であると思っています。自分はどう感じ、どう思っているのか。なぜそう感じ、なぜそう思うのか。そして、どうすれば他者にわかりやすく、正確に伝えることができるのか。すぐには無理だと思いますが、取り組む価値のある課題だと思っています。

4月からは1人の教員として、子どもたちとかかわっていくこととなります。今まで以上に自分と向き合うと同時に、子ども、保護者、同僚とも今まで以上に真剣に向き合う必要があると肝に銘じ、1つ1つ目の前の課題に取り組んでいきたいと思っています。

研究集会・公開研究会などの報告

伊那市立伊那小学校 平成28年度公開学習指導研究会

スクールリーダー養成コース／福井佼成幼稚園 前田 栞里

伊那小学校の実践は幼稚園や保育園の活動を発展させた取り組みに近いと読みやすいのでは・・・とお勧めをいただいたのがきっかけで夏の集中講座 cycle 1 で伊那小学校『学ぶ力を育てる』というテキストを取り上げて読んだ。教職大学院に入学するまで幼児教育の世界しか見てこなかったのと、自分自身保育者としての経験が浅いことから、“小学校”という自分の小学校時代に経験した“机に座って学ぶ”イメージしかなかった。幼稚園、保育園の活動を発展させた取り組みをしている小学校って？ どういうことなのだろう？と全くイメージがつかず探り探りで実践記録を読んでいたのを思い出す。記録を読み進めていくと、活動が子ども主体となって進んでいることが分かり、確かに自分が現場で取り組んでいることに近いと感じる。しかし、文面だけでは取り組みが明確に見えず、実際に自分の目で伊那小学校の取り組みを見たい気持ちが芽生える。カンファレンスで2月に公開学習指導研究会があることを知り参加することを決める。一人で参加するの・・・と不安に思っていたが嬉しいことに職場の先輩職員も参加してくれることとなった。

夜行バスに揺られ眠い目をこすり目的地に着くと、あまりの寒さに目が覚めた。校門前までくると作業服を着た子ども達が生き生きと走って私たちの目の前を通り過ぎていく。どうも“ともがき広場”と呼ばれる場所へ向かっているようだ。行きのバスの中で、伊那小学校の取り組みについてのビデオ視聴をしていたこと、引率してくださった小林和雄先生から授業を見るポイントを教えていただいたことで、とりあえず子ども達のあとを追いかけて“ともがき広場”へと向かった。ともがき広場の第一印象は、地元である福井市でいうと足羽山動物園を思い出したが、一緒に同行した先輩職員はとなりで「(某テレビ番組の)○○○村みたい!」と感動していた。小学校の公開授業に参加するのは初めてであったため、他の学校と比較する知識がなくその分純粋な気持ちで子ども達の姿や取り組みを見学することができた。登校した子から各クラスで飼っている動物のエサやりや体調管理を自主的に行っていた。体調管理をするためにフンやおしりの確認や、小屋の掃除を

当たり前のように行っている子ども達の姿に感動した。自由参観授業では、私が今年5歳児を担当していることもあり、1年生の姿を追った。ひつじのための小屋づくりをしており、子ども達は、自分がやらなければいけないと思うことを自分で見つけ、行っていく。それを教師は時々声を掛けながら見守る。最後にはクラス毎に集まってふりかえりをしていく。ふりかえりを行うことで、明日はどうするか…というような課題を子ども達自身が見つけ、次の活動につなげることをみんなで確認できていて、活動のあとのふりかえりを毎日くりかえすことの大切さを改めて感じた。

ともがき広場見学のあと、校舎内に入り1年生のクラスの掲示物を見に行った。教室には4月からの活動の様子を模造紙にまとめたものが掲示したあり、子ども達からも今までの取り組みがいつでも振り返って見て取れる環境の構築をされていた。取り組んでいる活動を深め、発展させるうえでは大切な環境設定であるとしても勉強になった。他の教室も見て歩くと教室の真ん中に大きな水槽が置いてあるクラスがあり衝撃的で2度見した。部屋の真ん中に水槽があるなんて!しかも、子ども達の机がその水槽を取り囲むように水槽に向かって設定されているなんて!と最初は驚いた。しかし、そのあとのこのクラスの共同参観授業で子ども達が魚に名前をつけ大切に飼っている姿を見てこのような環境設定もありなのだ納得することができた。常識にとらわれず、色々な考え方を教師自身も持つことが大切なのだと感じた。

幼児期の遊びの中で見られる子どもたちの生き生きさが伊那小学校の子ども達にも見られ私も楽しみながら参観することができた。今年度から遊びを深めることができるようにと、自分のクラスでも“ふりかえりの時間”を設けている。4月から比べると挙手をして発表する姿が増え、ふりかえりの中身が濃くなってきているように感じていたが、まだまだ保育者が入り言葉を投げかけていく必要がある。普段の子ども達の姿を思い描くと、話す言葉や内容がさすが小学生だなと思った。誰かに伝えたいくなるような生き生きとした濃い体験があるからこそ自分の感じた

ことを相手に伝えようとする姿があるのだと感じた。自分の言葉で伝えたいような体験ができるよう、取り組みを私自身が見つめ直していきたいと思った。また、教師が子どもの話す内容を上手く拾って話を広げる指導法が勉強になった。園に持ち帰って明日



からの保育にも生かしていけそうな学びが多くあり、参加することができて本当に良かった。園に帰ったら職場の仲間にも若手中堅の立場としてこの学びを広め、共有していけるよう努めていきたいと思っている。



板橋区立赤塚第二中学校ラウンドテーブル

板橋区立赤塚第二中学校 ラウンドテーブルを終えて

教職専門性開発コース／福井大学教育学部附属中学校 田中 亮

今回赤塚第二中学校にラウンドテーブルに行かせていただき、まず驚かされたのは、校舎全体がきれいで、生徒の作成物やこれまでの学習の経過がわかるもので満たされていたことである。見学していて特におもしろいと思ったものは、英語委員会が作成したおみくじである。おみくじには大吉、中吉といった結果が英語で書かれており、中身には「恋」、「勉強」という欄がありその内容も英語で書かれている。私の引いたおみくじの「勉強」の欄には「補習になるでしょう」と書かれていた。

また教室の扉の外側が一面ホワイトボードになっており、生徒または教員が、明日の連絡や宿題、などさまざまなことを書き込み活用している姿が見られた。各教科のスペースには、直近のその教科に関連するニュース、生徒が授業で学習した内容をより深く、専門的にまなぶことができるような資料や本が置かれていた。

私は、赤塚第二中学校には、生徒が自分のやりたいことを実現するための「自分を表現できる環境」が整っているように感じた。自分がやってみたいことを表現し仲間と協力しながらいろいろなものを作り上げていく場がここにはあると思う。赤塚第二中学校の生徒をみていて学校に来るのが毎日楽しくて学

校に来ているんだということがひしひしと伝わってきた。生徒の中に学校生活での規律はありながらも、見ていてすごくあたたかい気持ちになれるような生徒の「自由」の姿を見ることができた。

授業実践の見学では、英語科の杉山教諭の授業を見学させていただいた。授業内容は、人称代名詞の目的格を使って自分が好きなキャラクターや芸能人が友達は好きか嫌いかを聞いていくゲームを行っていた。生徒の様子を見てみると、なるべく多くの生徒に自分が好きなキャラクター、俳優を紹介しようと話す相手を探すために教室を歩き回っていた。

このゲームを行う生徒を見て、自分の好きなものを英語で話すことがまず生徒の興味を引き立たせており、隣の席の生徒だけではなく、多くのクラスメイトと人称代名詞をつかった自分が興味をもったことでの会話を数多くすることで、会話の中で人称代名詞が自然とでてくるようになっていたように感じた。ある一人の生徒は15人の生徒と会話をしていたが、1人目の時と比べものにならないくらい最後には自身を持ってすらすらと自分が好きなものを発表していた。私は英語を話すことは実技教科と近いところがあると感じている。いかにその動作を「自然」に行うことができるようになるか。そしてその動

作を自分の言葉で説明できるかというところである。今回の授業を見学させていただき、「自然に身につける」ための授業の構想から多くのことを学ばせていただいた。

このラウンドテーブルを振り返り、生徒が表現活

動を活発に行える環境。そして教師の授業に対する熱意。これこそが生徒の心を動かし自ら主体的に学ぼうとするきっかけになっているのではないかと感じた。

学位記伝達式

去る2017年3月23日(木)、コラボレーションホールにて平成28年度の学位記伝達式が執り行われました。平成28年度は、教職専門性開発コース5名、スクールリーダー養成コース21名、ミドルリーダー養成コース3名、学校改革マネジメントコース1名の合計31名の院生が教職大学院を修了しました。式では、在校生やスタッフが見守る中、石井バークマン麻子研究科長から祝辞と一人一人に学位記が授与されました。

学位記伝達式の後に、再出発のカンファレンスが行われました。赴任先が決まらずに、これからが描けない不確かさから戸惑いを覚える院生の方もおられました。「今は何も語れない」と。しかし、語りと傾聴で積み上げられてきたカンファレンスは、みなさんの深い語りを引き出していきました。何を大切にしてきたのか、何が大切なことなのか、これから何をしていきたいのか、これまでとこれからを繋ぐ、語りと傾聴の時間がどのテーブルでも繰り広げられました。教職大学院を修了された方にとっても、1年目が修了された方にとっても、一つの区切

りは次の始まりであり、それを確かめ合った再出発カンファレンスとなりました。

最後に、3年間の任期を終え長野県に戻られる宮下哲先生よりご挨拶がありました。「わたし達の急務はただただ眼前の太陽を追いかけるのではなく、自等の内に高く太陽を掲げることだ」という島崎藤村のことばを引いて、小さくまとまって完結しない、志、高く上を向いて歩み続けようとの言葉を下さいました。4月以降、長野市にある北信教育事務所の主任指導主事としてご活躍が期待されています。新たな教職大学院の強力な支え手を長野に得た思いが致します。

卒業された院生のみなさんと宮下先生にこれまでの感謝の言葉と、院生のみなさんにはお祝いの言葉を申し上げるとともに、今後もこのご縁を大切につながり合っていきたいと思っております。

(荒木良子・笹原未来)



平成29(2017)年度 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻 2017.4.8

4	1 土	1 土	1 日	1 月
	2 日	2 日	2 月	2 火
	3 月	3 月	3 火	3 水
	4 火	4 火	4 水	4 木
	5 水	5 水	5 木	5 金
	6 木	6 木	6 金	6 土
	7 金	7 金	7 土	7 日
	8 土	8 土	8 日	8 月
	9 日	9 日	9 月	9 火
	10 月	10 月	10 火	10 水
	11 火	11 火	11 水	11 木
	12 水	12 水	12 木	12 金
	13 木	13 木	13 金	13 土
	14 金	14 金	14 土	14 日
	15 土	15 土	15 日	15 月
	16 日	16 日	16 月	16 火
	17 月	17 月	17 火	17 水
	18 火	18 火	18 水	18 木
	19 水	19 水	19 木	19 金
	20 木	20 木	20 金	20 土
	21 金	21 金	21 土	21 日
	22 土	22 土	22 日	22 月
	23 日	23 日	23 月	23 火
	24 月	24 月	24 火	24 水
	25 火	25 火	25 水	25 木
	26 水	26 水	26 木	26 金
	27 木	27 木	27 金	27 土
	28 金	28 金	28 土	28 日
	29 土	29 土	29 日	29 月
	30 日	30 日	30 月	30 火
5	1 月	31 月	31 火	31 水
	2 火	1 火	1 水	1 木
	3 水	2 水	2 木	2 金
	4 木	3 木	3 金	3 土
	5 金	4 金	4 土	4 日
	6 土	5 土	5 日	5 月
	7 日	6 日	6 月	6 火
	8 月	7 月	7 火	7 水
	9 火	8 火	8 水	8 木
	10 水	9 水	9 木	9 金
	11 木	10 木	10 金	10 土
	12 金	11 金	11 土	11 日
	13 土	12 土	12 日	12 月
	14 日	13 日	13 月	13 火
	15 月	14 月	14 火	14 水
	16 火	15 火	15 水	15 木
	17 水	16 水	16 木	16 金
	18 木	17 木	17 金	17 土
	19 金	18 金	18 土	18 日
	20 土	19 土	19 日	19 月
	21 日	20 日	20 月	20 火
	22 月	21 月	21 火	21 水
	23 火	22 火	22 水	22 木
	24 水	23 水	23 木	23 金
	25 木	24 木	24 金	24 土
	26 金	25 金	25 土	25 日
	27 土	26 土	26 日	26 月
	28 日	27 日	27 月	27 火
	29 月	28 月	28 火	28 水
	30 火	29 火	29 水	29 木
31 水	30 水	30 木	30 金	
6	1 木	31 木	31 金	1 木
	2 金	1 金	1 土	2 金
	3 土	2 土	2 日	3 土
	4 日	3 日	3 月	4 日
	5 月	4 月	4 火	5 月
	6 火	5 火	5 水	6 火
	7 水	6 水	6 木	7 水
	8 木	7 木	7 金	8 木
	9 金	8 金	8 土	9 金
	10 土	9 土	9 日	10 土
	11 日	10 日	10 月	11 日
	12 月	11 月	11 火	12 月
	13 火	12 火	12 水	13 火
	14 水	13 水	13 木	14 水
	15 木	14 木	14 金	15 木
	16 金	15 金	15 土	16 金
	17 土	16 土	16 日	17 土
	18 日	17 日	17 月	18 日
	19 月	18 月	18 火	19 月
	20 火	19 火	19 水	20 火
	21 水	20 水	20 木	21 水
	22 木	21 木	21 金	22 木
	23 金	22 金	22 土	23 金
	24 土	23 土	23 日	24 土
	25 日	24 日	24 月	25 日
	26 月	25 月	25 火	26 月
	27 火	26 火	26 水	27 火
	28 水	27 水	27 木	28 水
	29 木	28 木	28 金	29 木
	30 金	29 金	29 土	30 金

* OECD インベシジョン教育ネットワーク 国際会議@国立オリンピック記念青少年総合センター * JICA Group and Regional-Focused Training: Improvement of Quality of Education through "Lesson Study" in Asia ** WALIS(World Associate of Lesson Study: 世界授業研究会) 2017 年大会@名古屋大学 11/25-29 福井Immersion Programme

福井大学教職大学院 「学校改革実践研究報告」目録(平成 28 年度分)		
No.	名 前	論文名(主タイトルのみ)
264	串 尚哉	「わからない」といえる教室
265	藤田 芳幸	環境の中で「人」が学ぶ
266	増谷 淳	省察的実践による学級集団の成長
267	松山 琴美	自分をひらき社会と繋がる
268	山田 晃大	「三つの学び場」で学び続けた軌跡
269	荒木 直則	教育相談的視点をもった子どもとのかかわり
270	大黒 康弘	探究するコミュニティ
271	小野 拓士	問いつづける子が育つ～協働で学び合う授業の創造～
272	河端 稔	永遠の未完成、これ完成なり
273	観 寿子	「学びに向かう力」
274	神部 浩平	実践が生み出すコミュニティ
275	北村 仁志	支え合い学び合う教師集団の育成を目指して
276	黒瀬 卓秀	私立中高一貫校における超えて抜けてつなげる取り組み
277	佐藤 大典	「教師」になる
278	塩川 史	学校文化を考える
279	高松由紀子	子ども・教師・学校の成長を支える組織
280	名倉 康浩	教師の「学ぶ意欲」をいかに培うか
281	西 繁寿	進学校における生徒と教員の探究 それを支える実践コミュニティ
282	浜上 千恵	若手教員の実践的指導力向上を支援して
283	藤井 芳文	学校文化の継承と生徒指導
284	藤本 純子	教師力アップを目指すこれからの研修をつくる
285	堀 紘	生徒・同僚の力を引き出せる教師像
286	マグラブナン ポリーン	The ABCs of My Professional Experiences :From Philippines to Japan
287	正木 啓敬	質の高い対話の生まれる授業を求めて
288	茨田 隆徳	対話的な学びをつくる
289	吉川 輝美	支援者として学び続ける
290	五十嵐 洋行	「対話」の先に差し込む光
291	黒田 和子	学ぶ力を蓄えていくこと
292	島田 裕美子	学びの共創
293	久保 文	自分の枠
294	矢部 正道	「教師」であることを問い直す

【 編集後記 】

春というにはまだ肌寒い頃、決まって思い出す光景があります。お気に入りの散歩コース、あの角を曲がると、かすかな香りがして、心と見上げる先の古風な塙の上に白梅の花が見える…今年も春が来たと思う瞬間です。これから始まるという不安と期待が膨らみます。花が咲き、緑が繁り、実がなり、次の世代へと繋ぐ。本年度もよろしく願いいたします。(Y)

教職大学院 Newsletter **No.95**

2017.4.8 内報版発行
2017.4.15 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp